

21 世紀を生きるためのわたしの「価値観」

(原文)

片山 芽生 (18 歳)

東京都

晃華学園中学校高等学校

私たちはものごとが常に目まぐるしく変化する社会の波の中で生きている。昨日まで正しいと信じていたことが覆され、無敵だと思っていたものが崩され、当たり前だと思っていたことがそうでなくなる。逆に、昨日まで成し得なかったことができるようになったり、わからなかったことがわかるようになったりすることもある。こうした変化は、世界規模で起こることもあれば、個人の中で静かに起きることもある。私の中で変化が起きたときと言えば、例えば、学校で新しいことを学んだとき、新聞の社説で自分が思ってもみなかったような考えに出会ったとき、メディアで世界の悲惨な貧困の現状やむごたらしい戦争の跡を見たときだ。その度に、私の中で何かが音もなく崩れたり、むしろ今までバラバラだったものが一気に定まった形になったりして、私の「価値観」は形成されてきた。価値観というと、人が何かを信じ、それをあらゆる判断の基準とするイメージがある。だが、私は何か一つのことにとこだわってものを信じたり、それを日々の拠り所とするよりも、むしろ、毎日少しずつ時代に合わせて、人々に合わせて、自分の成長に合わせて、ものの見方、考え方、行動を変えていきたい。こう言うと、周りに流され、自分を見失いがちな人のように聞こえるかもしれない。だが、変化の目まぐるしい日々において、頑固に一つのことにと固執するよりも、周りに目を向け、耳を傾け、その都度正しいと思うことをそのときの自分の「価値観」にしたい。

私がこのことを強く感じるようになったのは、4カ月前から続いているロシアによるウクライナ侵攻がきっかけだ。世界史を学んでいると、世界規模で見て100年と平和な日々が続いた時代なんてないが、それでも21世紀は大丈夫だと思っていた私にとって、いとも簡単に平和が崩れてしまったことがとても衝撃だった。しかし、つい最近になって日本に住む私たちもどこかアメリカ寄りの偏った視点でロシアを見てしまっているということに気がついた。そして、この戦争で多くの人がロシアに対する批判的な考えを持つようになり、何かと「ロシアが」と私たちは言うようになったが、ロシアの国や人々そのものが非難の対象になっていいはずなんてない、と強く感じるようになった。幼いころからクラシックバレエを習い、ロシア人の先生に教わることもあった私にとって、今でもロシアの文化や芸術には敬愛の念を抱いている。また、冷戦直後の米露間の対話を見ると、決して今の戦争がロシアだけに責任があるわけではないこともわかった。また、世界史を学び、ロシアとウクライナの今まさに問題となっている民族の認識の違いが中世の、特にカトリックとギリシア正教の伝播にまで遡るこ

とができることもわかった。そして、新聞からこの戦争が台湾や沖縄の情勢にまで大きな影響を与えていること、ヨーロッパの諸国がウクライナの人々の受け入れや援助を急ぐ中、ウクライナに住む一部のアフリカ系の人々へ救いの手が差し伸べられなかったことや、援助のやり方にはそれぞれの国の政策や外交上の思惑があることも知った。この4ヵ月で私の頭や心は世界で日々起こる様々なことでいっぱいになり、その度に新しい感情がふつふつと私をうずまいて、私は少しずつ変化したり、バージョンアップしたりする私の考えや感じ方に動揺するほどだったが、その過程で私は新しい自分の価値観に出会うことができた。そして、今、私はこれからも変化していくであろう私の感じ方や未来の私の「価値観」にワクワクしている。平和を願う気持ちや世界をよりよくしたいという想いはずっと変わらなくても、世界に対する向き合い方を常に微調整していくことこそが、日々変化する世界の様々な問題を解決していく手がかりであると信じている。そして、そのためには日頃の学びを大切に、新しい知識を身に付け、多角的な視点を持つことを忘れずにしたい。